

## Down Memory Lane ~prologue

センター試験を明日に控えてた。

陸上部の活動のあった頃は毎日のように6人で帰り道を歩いてたけど…でも、引退してからもなんだかんだこうして6人で帰ること、結構あったよね。

だから、特別な話をするんじゃなくて、いつものノリで話してるだけ。

例えば、受験終わった後にどこに遊びに出かけるかなんて話を茜がし始めたから、彩は話に乗るけど、いつも通りの優柔不断で答えらしい答えにならない。やっぱり麻衣は「大事な試験前にそんなに浮かれてたら」なんて言うわけで。里奈は「そりや試験も大事だけど遊ぶのも大事じゃん」ってケラケラ笑っててさ。美穂は受験が明日だろうが「明日のことなんて考えんなよ」とか飄々とする。千尋は何も言わないし笑ってるようにさえ見えないのでこの状況が面白くて仕方ないみたいで、本当に顔に出ないタイプなんだなって。

なんでまたそんな大事な試験の前日の放課後につるんでるかといえば、明日が大事な試験だからっていうそのものが理由であって。

6人はめぐ先生にカツ入れてもらって、明日も全力で行こうという心づもりだった。1人を除いては。

「あの…さ」彩が申し訳無さそうに切り出した。「やっぱりセンター受けない私まで行くの変じやない？」彩は小柄でとっても可愛らしい見た目をしているんだけど、声も小さくてやっぱり可愛らしいものだった。髪の毛もふわふわならば、雰囲気もふわふわなのだ。

「いーの！」対して里奈は、見るからに気が強そうだ。「こーいうのは6人じゃなきゃ！」話し方がそう聞こえなくったって、言ってる内容は優しいのが里奈だった。

今日は金曜だから、グラウンドに着けば現役である1、2年生の後輩たちが練習の日だった。でも顧問のめぐ先生の姿はなかった。

後輩たちは、6人に気がつくとみんな挨拶をして、その中の1人に聞けば、めぐ先生は昨日も子供が風邪をひいて来なかつたらしい。

麻衣がメガネの位置を直しながら「職員室で聞いてくるよ」とせっかく言い出そうとしたのに、6人のじょんけんは突如始まった。手にミトンをした彩だけがチョキを出せなかったわけではないけれど、それでも他の全員がパーを出したので“誰が職員室まで走るか”が決まった…ように見えた。「彩はマネージャーなんだし」言ったのは茜だったが、みんなそう思っていた。右手でパーを出した茜の左手に収まっていた折りたたみの携帯をスルッと取り出した里奈がその左手を指さして「茜もグーじゃん！」とか言い始めて、決まったはずのじょんけんがめちゃくちゃになるのだった。でも、高校生って、そんなもんでもよかったです。

結局なぜか茜と里奈が再じょんけんしていた。モデルさながらの容姿の千尋は相変わらず何も言わずにじっとそれを見つめるだけで、まるでマネキンのようだった。でも、心の中では誰よりも盛り上がっていた。後輩の一人がじょんけんに気付いて「私もさっき職員室に行って聞いてきた」と報告しようとするのを、美穂がそのギョロッとした目を向けながら「ぜってーそれ言うなよ」と阻止する。麻衣はじょんけんの頃からもうずっと呆れていた。

高校生の間、ずっとそうやって過ごしてきた。

茜は校舎のほうへ走り始めた。

1月の空気は冷たく、走るとそれが顔に突き刺さるようだった。

私たちはすべての季節を走ってきた。

部活を引退してからはそんなに走ることなんてなくなってしまったのを実感して、茜は、この高校生活で走るのがずいぶんと楽しくなったのだと思い返していた。

職員室まで走ると、「さっき電話かけたけど繋がらなかつたんだよね」と教員が教えてくれた。

また走って校庭に戻ると、状況を後輩からすでに聞いていた他の5人が待ち受けた。茜自身すらそれが面白かった。

走って温まった茜が「一本やろ、そんで帰ろ」って言うと6人が円陣を組み、「桜川一つ！」「走るぞ！」と麻衣が言うのでその度みんなで「お一つ！」と返した。

そしてトラックのほうへとポツポツ歩き出すのを、「一本やる」って、もしかして走るの？」ともう終わつたつもりだった麻衣が驚いた。

彩は自分がみんなを見守る役目とばかり思っていたから、「あれ彩？」と聞かれて初めて「私マネージャーだし」「明日もセンター受けないし...」と色々並べた。美穂が悪い顔しながら「バカやるときの抜け駆けは許さん」なんて言うもん走らざるを得なくなつた。そこを千尋が涼しい顔しながら「行くよバカども」と美穂もろとも連れて行つてしまつたのだった。

千尋、きっと心底楽しかったに違いない。

週明け、センター試験を終えた私たちはめぐ先生が退職したことを知らされた。

でも、あのめぐ先生だから。

めぐ先生だって私たちに会いたいに決まっている。

あっという間に卒業の日は來た。

陸上部の部室内、どこにするかは迷つたけど、結局ロッカーをどかした壁のどこに私たちはこう残した。

めぐ先生  
これ見たら絶対連絡ちょうどい！！！  
あかね　まい　みほ  
りな　あや　ちひろ  
2010.3.6

もう誰も、先生に会うことすら叶わないと知らずに。

15年という歳月を経なければきっと理解できなかつたと思う。

私たちがめぐ先生について何も知らず、この15年もの空白が何者かによる「意図」によって存在してしまつたものだったと。

あれから15年たつた今だからこそ、こうやって物語に託したい。

2025.3.6